

令和 6 年度秋田県総合政策審議会第 3 回教育・人づくり部会議事録

- 1 日 時 令和 6 年 8 月 21 日（水）午後 1 時 30 分～3 時 30 分
- 2 場 所 県庁第二庁舎 教育委員室
- 3 出席者
 - 委員 荒木 直子（国際教養大学国際教養学部教授）
佐藤 学（秋田大学大学院教育学研究科教授）
高橋 今日子（東京大学大学院新領域創成科学研究科特別研究員（R P D））
廣田 千明（秋田県立大学システム科学技術学部准教授）
 - 県 藤澤 修（秋田県教育庁教育次長）
高島 知行（秋田県教育庁総務課長） ほかに関係課室長等

1 開 会

□佐々木政策監

ただいまから令和 6 年度秋田県総合政策審議会第 3 回教育・人づくり部会を開会します。
それでは佐藤部会長、よろしくお願いします。

2 議 事

●佐藤部会長

次第に沿って進める前に一言申し上げます。審議内容は、議事録としてウェブサイトに掲載されます。その際、委員名は特に秘匿する必要はないと思いますので、公開で行いたいと考えておりますが、よろしいでしょうか。

（１）これまでの教育・人づくり部会における主な意見等について

（２）提言（素案）について

●佐藤部会長

それでは、議事に入ります。議事（１）、（２）について事務局から説明をお願いします。

□伊藤教育庁総務課副主幹

（部会資料－１、部会資料－２に基づき説明）

●佐藤部会長

ただいまの事務局の説明につきまして、御意見・御質問はございますか。

特にないようですので、意見交換に移りたいと思います。

はじめに、提言 1 について御意見ををお願いします。

【提言 1】

○荒木委員

背景を二つに絞るにしても大変重要な箇所ですので、凝縮するほか、詳しく書いているところは「例えば」として、ほかと結び付けるのはどうでしょうか。短いものもあれば、詳しく数値化して書いているものもあり、全て 2 個に絞って取ってしまうのはもったいないと思います。

□伊藤教育庁総務課副主幹

提言の背景に記載しているものを提言の具体的な方策に入れ込むといった工夫は可能かと思います。

●佐藤部会長

問題意識を持っていただけるよう、削るというよりは強調すべきものを二つ見つけて、それ以外は提言の中に書き込むといった工夫をすればよいということですね。

今、背景が四つありますが、2 番目と 3 番目は一つにまとめることができそうです。あと二つありますが、何を強調するかですね。

○荒木委員

四つ目も女子生徒のキャリア選択に関するものなので、一緒にしてよいのではないでしょうか。

●佐藤部会長

離職状況、自己理解、女子生徒の理工系への進路選択を啓発することについて、まとめるということよろしいでしょうか。

それでは、提言や具体的な方策について御意見ををお願いします。

○高橋委員

荒木委員の御意見に関連して、提言が 1 から 7 までありますが、例えば、③のラーケーションが具体的であるのに対し、①は総合的な話をしているなど、提言の深度がバラバラなのが気になります。

他の提言についても、例えば、提言 4 については①と②はいずれも ICT を活用した不登

校児童生徒への対応についてであり、なぜ分ける必要があるのか。提言も整理しながら見ていく必要があると感じます。提言の背景を整理していくと、提言のレベル感も揃っていく気がします。

●佐藤部会長

ラーケーションは位置を下げた方がよいでしょうか。

○高橋委員

順番も考える必要があると思います。

●佐藤部会長

ラーケーションは一番最後がよいかもしれませんね。

○荒木委員

背景の最初の「情報化」「グローバル化」「探究型」に結び付くのが①～③です。そのように整理していくと背景に結び付かない提言も出てくと思いますが、「その他」にしてしまうと少し弱くなってしまうことから、「今後、未来に向けて」のような文言を加えるなど、グループ分けをすると分かりやすく伝わると思います。一つの背景に提言が一つしかないというものも出てくるかもしれませんが、そのような整理の仕方もあると思います。

また、ラーケーションについては、具体的にどの背景につながるのかが分かりにくく、突然出てきた感があるので、例えば、具体的な方策に、総合的な探究学習について、家庭の協力を得ながら進めていくためにラーケーションを導入する旨を記載してはどうでしょうか。

ラーケーションの導入は、家庭で取り組んだことが学校でも認めてもらえるという意味で、不登校や学校行き渋りを経験している生徒にとってもよいことだと思います。探究心を育むためにラーケーションを導入するということを記載できれば、つながりが見えてくると思います。

○廣田委員

ラーケーションは親子の関係を大事にするということだと思うので、提言4の豊かな心の育成につながるのかもしれないと思いました。また、ラーケーションで休んだ子どもの対応は、結局のところ、不登校児童に対する対応と同じなので、提言4に入れても良いのではないのでしょうか。

●佐藤部会長

ラーケーションは、色々なやり方ができるのではないのでしょうか。観光・交流部会では、どのような期待をもって提案してきたのでしょうか。

□伊藤教育庁総務課副主幹

観光・交流部会では、土日が休みでない業種の保護者が、平日に子どもと一緒に過ごす時間が取れることによって、そういった業種について人材確保が図られるのではないかとといった観点からの意見だと思いますが、教育側とすれば、平日に、保護者と一緒に出かけて、例えば博物館に行ったり、伝統芸能を体験したり、文化遺産に行ったりなど、校外学習や探究学習に活用してほしいという目的で実施することとなります。そういった意味からすると、提言1になるのではないかと思います。

●佐藤部会長

付加価値を付けて、提言4に移すという考え方もありますが、いかがでしょうか。

私は、提言1は多様な子どもたちに向けた方策と理解しています。確かに、不登校傾向の子どもたちへの対応が強調されないと思いますが、そうした子たちに対するメリットがないということでもありませんので、提言1になると理解しております。もし問題がなければ、この位置づけにするとということによろしいでしょうか。

○廣田委員

「地域をフィールドとした探究的な学習や課題解決型学習の推進」ということで、「地域をフィールドとした」という部分が強調された形になっています。もちろん地域も大事ですが、そういう縛りがない全般的な探究的な学習や課題解決型学習をもっと推進していった方がよいという思いがあり、あえてこれを付けるべきなのか考えてしまいます。

○高橋委員

前回、私は逆のメッセージを言っていたような記憶があります。秋田は「地域を見つめよう」「地域に対して何かしよう」という教育が多く、子どもたちが秋田を背負わされているような気がするから、なるべく地域に縛られないような視点を持ち、グローバル教育も含んだ形で取り組んだ方がよいという意見を出したつもりでした。

廣田委員の御意見に同意しますが、『自分の地域で探究的な学習を行うことは、自分たちが実際に住んでいるところだから理解しやすい、探究しやすい面がありますが、それによって「秋田に貢献する人材になってもらえる」「秋田に何かしてもらえる」といった期待を込めて進めることではない』という意味を込めて意見を出したつもりです。

「地域をフィールドとした」という部分は、提言の背景にも出てこないのも、もう少し言い方を考えられないかなと感じます。

●佐藤部会長

地域で学べる良さはあると思います。先ほど五城目町の話をしていましたが、秋田には子ども

が学ぶには最高の環境があると思います。確かに地域を背負うとなってしまうと、職業を選択する際にも地域にあるものから考えなければならないとなってしまう、方策に書かれてある「地域を見つめ、地域に対して何ができるのかを考える」は、やや重たい感じはします。

一方で、総合的な学習の時間においては、単に学ぶだけではなく、学びを地域に返していくということが重要な視点ですので、地域で学ぶことをどのように表現するとよいか悩みます。その地域に縛るという意味での地域貢献ではなく、地域住民であるという意識を形成する上で、地域に何か貢献できることは大切だと思います。

○荒木委員

その場合、提言として新たに出す意味があるのかということになりますが、現在、行われていることに付加価値を付けるということは意味があると思います。地域について学習していくことは、小学校の段階から学習指導要領に基づいて行っていると思うので、ここでは、『何をもって「探究」というのか』という視点がずれているのかもしれませんが。総合的な学習の時間、総合的な探究の時間における「探究」について、もう少し詰める必要があるのではないのでしょうか。秋田に限らず、本来、生徒主体であるべき部分が、指導する先生主体に多々なりがちだということはよく聞きます。探究の対象ではなく、「探究的な学習とは」ということをこの会議でどのように捉えているのか、どのようなことを提言に入れたいのか、とても大きな議論になると思いますが、考える必要があると思います。

●佐藤部会長

総合的な学習の時間について、当初スタートした頃よりも、今は内容が固定されており、ここで挙げられているようなグローバルな問題が取り上げられているかということと案外そうでもありません。探究を提言していくことは、学校に対するメッセージになると思います。

また、地域で学べるということは、やはり秋田のよいところだと思います。秋田の課題を知ることが、総合的な学習の時間で子どもたちが考えるということは、秋田の将来を支えることとは別に、より良い問題意識を持つことにつながると思います。前回、「秋田ブランド」ということで意見を出しましたが、「秋田で学び、育ってきたから、しっかりしているんだ」ということになってくれれば良く、そういう意味では、地域で学ぶことの良さをアピールしていきたいと思います。

○荒木委員

「地域をフィールドとした」と限定せずに、「生徒主体の」という言葉に置き換えれば、地域のことを学びたい生徒も、それ以外の例えば生物系のことをやりたい生徒も対象となってきます。「生徒主体の探究的な学習」ということをもっと強くメッセージとして発信してはどうでしょうか。家庭や学校でも子ども主体とはどのようなことなのか考えてもらうことができ、ワーケーションにもつながっていくのではないのでしょうか。

●佐藤部会長

「地域で学ぶ」ということは、具体的な方策の中に組み込めば問題ないと思います。

○廣田委員

逆に、探究とは関係なく、「地域をフィールドとした学習の推進」としても良いのかなと思います。提言1は、「秋田の将来を支える高い志」とあるので、秋田のことを意識してほしいという思いがあると考えます。

先ほどお話しした「探究的な学習や課題解決型学習をもっと推進していかなければならない」という意見は提言2に書かなければならない話であり、提言1に書くとすれば「秋田の課題について小さい頃から考えてほしい」ということだと思います。そのため、そこに焦点を当てて「地域をフィールドとした学習を推進する」という書き方でもよいのかなと感じました。

○高橋委員

この提言には、大きく分けると「地域」と「生徒主体」の二つの話があると思います。保護者も含めた「生徒主体」と考えるとラーケーションも入り、自己理解を深めていくことで、生徒自身がどういった勉強をしたいのかということや最終的に新卒者の離職も防ぐことにもつながっていくということだと思います。

一方で、地域をフィールドとするということは、足下から勉強していくという意味で大事であることも体感として分かるため、地域をフィールドとした探究学習や課題解決型学習を通じて、秋田らしい仕事や職業に触れる機会を設けることもできることから、小・中学校において①と②がリンクすると思います。このように色分けしていくと、提言につながっていくのかなと思いました。

もう一回整理すると、「地域をフィールドとした」ということで、①と②が関連しており、地域をフィールドとした探究学習や問題解決型学習を進めることによって地域を理解していくことにつながります。地域の仕事に多く触れることにより、小・中学生のうちから職業の選択肢を広げることもつながるため、⑤と⑥がつながります。①②⑤⑥がつながるとすれば、これで「地域での人材育成」ということで一つになります。

もう一つが、生徒主体の探究的な学習や課題解決型学習を進めるということで、主体に保護者も含めて、ラーケーションの導入などの自由な学びにつなげていく、生徒主体で学ぶということは生徒の自己理解を深めることになるので④の話になります。そして、自己理解を深める中で、女子生徒が理工系に進路を選択するとなれば、⑦もつながることになります。⑤⑥は、もしかしたら両方につながるかもしれません。

このように、提言を「生徒主体」「地域」の大きく二つに分けることによって、読んでいの方もストーリーが見えて分かりやすいと思います。どれも大事な話なので、まとめ方をど

うするか、ミスリードされないようにどうメッセージを伝えていくかということが重要だと思います。

○荒木委員

「地域」と「教育」に分けてはどうでしょうか。生徒主体ということからはずれてきてしまうかもしれませんが、教育全般を進めることが就職やキャリア選択につながっていくことになると思います。

○高橋委員

「地域」というのは、提言1の「秋田の」についての話で、「教育」というのは同じく「将来を支える人材」の話といったように整理すると、「秋田の将来を支える人材」の育成につながります。

○荒木委員

「地域社会」と「人材育成」に分けると提言1もすっきりすると思いますね。②③④⑥⑦は人材育成、総合的な学習の時間を地域における学習と捉えると①が地域社会、⑦は企業とみなし、地域ではどうでしょうか。

●佐藤部会長

お話を聞いていると、①だけが違う気がします。

○荒木委員

①も人材育成になるかもしれません。

●佐藤部会長

そうすると原案のままでよかったのではないかの考えになります。

○廣田委員

②④⑦は、子どもたちの進路選択をサポートしていく内容になっています。小さいうちから、将来どういう仕事に就きたいかについて考える機会を増やしていくことは大事だと思います。

一方で、⑤⑥は就職した後の話であり、「決めた会社に長く勤められるためにどうすべきか」「何らかの理由で離職した場合には、学び直しをして、再チャレンジできる環境づくりをしていきましょう」という話です。

このような形で二つに分類できないかなと考えました。

●佐藤部会長

その場合は、⑦の位置を上げた方が良く、小・中・高・大学、そして就職という流れになると分かりやすいと思います。なぜ理系を推すのか。⑦に置いてありますが。

○荒木委員

総合的な学習の時間や探究の時間の役割が一層重要となってきたという背景が、人材育成とどう結び付くのかについて説明していただけるとありがたいのですが。

□藤澤教育次長

子どもたちは、主体性だけを育んでも秋田の将来を支える人材にはならず、主体性を育みながら、秋田を知る、秋田を掘り下げていく探究的な学習を発達段階毎に発展的に進めていくことが、提言1で掲げる人材育成につながっていくと考えています。また、提言2の確かな学力の育成においても、秋田の探究型授業に関する提言があり、これも学力向上につながっていくことではあります。

提言1の①から⑦は、キャリア教育というカテゴリの中で、発達段階毎に小・中学校、高校の順に並べています。

○荒木委員

一般の方には分かりづらいと感ずることから、キャリア教育がここに入っているということを背景の中に記載いただいた方が良くと思います。秋田県では、総合的な学習の時間等を使って、キャリア教育・人材育成を進めているということを書き加えることで、地域をフィールドとした学習につながっていくと思います。

□藤澤教育次長

総合的な学習の時間は、必ずしもそういった目的で行っているわけではありませんが、そういった側面もあるということです。一人でも秋田の将来を支える人材が育ってほしいと願っています。

□伊藤義務教育課長

県教育委員会で定めている「学校教育の指針」において、全ての教育活動を通して取り組む最重点の教育課題に「地域に根ざしたキャリア教育の充実」を掲げ、主に総合的な学習の時間や探究の時間において実践されてきていることから、これを更に充実させていかなければならないと考えております。

●佐藤部会長

①の具体的な方策に「キャリア教育」を入れてもらえば良いと思いました。色々と意見を

もらいましたが、基本的にこの流れでよいと思います。

提言1の「秋田の将来を支える」というのは、もう変えられないですね。

□高島教育庁総務課長

今回は変えられません。

●佐藤部会長

今後、部会で議論していきたいと思いますが、「秋田の将来」というのは、広く世界として捉えていければと考えています。

提言1は、概ね順番は変えませんが、補足していただくところは事務局の方で整理していただきたいと思います。

【提言2】

●佐藤部会長

提言2に移りたいと思います。

○荒木委員

提言2の背景についても、提言1と同様に整理して、具体的な方策に回せるものは回した方がよいと思います。文章の中からはあまり削除しない方が分かりやすいと思います。

●佐藤部会長

文章は長くなってもよいのでしょうか。

□伊藤副主幹

3行までが目安となっております。

●佐藤部会長

1番目は、一般に知られていることなので、削除しても構わないと思います。削除することによって分かりにくくなることは危惧しますが、思い切って強調すべきものは取り上げた方がよいと思います。3行までだとすれば、伝えられるものをきちんと伝えていくべきだと思います。

2番目の内容について、気になっている部分であります。算数・数学については後退し続けており、中学の数学については、全国平均と変わらないと言っても良い状況です。そのため、50代の先生方が築き上げた実践知をブラッシュ・アップする必要がありますが、若い先生も相当数増え、実践知の継承の難しさもあると思います。秋田型の授業を全く新しいも

のに変えるということではありませんが、捉え違いしている面もあると思うことから、改善していく必要があり、2番目の内容はぜひアピールしていきたいと思っております。

先日、全国的な傾向として、国語と数学の全国平均が基礎と思考力を問う問題で全然違うということが報道されており、いかに思考力・判断力・表現力を向上させていくかについて、県として先導的に取り組んでいただければと思います。

○荒木委員

大学の進学率も関係してくると思います。「どうせ自分の学力では大学に入れない」と思い込んでいる生徒もいるようなので、工夫次第で勉強の意欲につながっていくと思います。

●佐藤部会長

思考力・判断力・表現力が課題となっており、学習に対する意欲や態度の面においても危惧されるといったようなことが書いてあれば良いということですね。

4番目は、具体的な方策に書き込んでいただきたいと思います。

廣田委員、G I G A スクールについてはいかがでしょうか。

○廣田先生

その前に質問させてください。思考力・判断力・表現力を身に付けていくことは非常に大事なことです、これに対応した提言はどれが該当するのでしょうか。

●佐藤部会長

2番目だと思いますね。「新たな時代に対応した」というところに入っているのだと思いますが、「思考力・判断力・表現力を育てる秋田の探究型授業」とした方が伝わるのかもしれませんが。そのような表現に変えるということではよろしいでしょうか。

○高橋委員

「思考力・判断力・表現力」という表現になるのでしょうか。

●佐藤部会長

文部科学省で、この三つをセットで使っています。

○荒木委員

背景に、ICTの遅れがあるということを入れてはどうでしょうか。まだまだ活用できるような気がします。

●佐藤部会長

5 番目を 3 番目に組み込むこともできるのではないのでしょうか。子どもと先生のことで、内容は別々ではあります。

○荒木委員

ICT を背景に入れることで、ICT 関連の提言が生きてくる気がします。

●佐藤部会長

では、背景は 2 と 3 を中心にさせていただいて、調整していただきたいと思います。

○荒木委員

具体的な方策の③について、「ICT（生成 AI）」と入れていただけないのでしょうか。メリットもデメリットも含めどのように使ったらよいのか、どういった使い方が良いのか・悪いのかといった話し合いがないと便利性だけが追求されても危ういと感じていることから、あえて「ICT」の箇所に生成 AI も入れた方がよいと思います。

●佐藤部会長

それでは、そのように追加することとします。

【提言 3】

●佐藤部会長

提言 3 について、いかがでしょうか。

背景の 1 と 2 は一緒にし、1 と 3 に絞るということにしたいと思います。そのほか、提言について、何かございますか。

○荒木委員

③に「外国出身」と記載されていますが、「外国」「外国人」という表記をできれば避けていただきたいと思います。どうしても疎外感を感じる方もいらっしゃると思うので、「海外出身」など、「外国」という言葉を使わない提言にさせていただきたいと思います。

また、私が追加意見でお話したことですが、第二外国語を学習する機会というのは、必ずしも学校のカリキュラムでやるということではなく、『英語で「こんにちは」は「Hello」だね、じゃあ他の言語ではどうか』などの少しの促しをしていき、英語以外の言語にも意識を持ってもらう機会を設けてほしいということで伝えさせていただきました。第二外国語を学校で教えてくださいということではなく、英語中心になりすぎない、ほかにも言語があるという促し方は非常に大切だと思います。

○高橋委員

それを踏まえると⑤の表現をもう少し変えた方がよいですね。

○荒木委員

グローバル化が進む中で、セカンドランゲージ、サードランゲージという順番を付けるのは止めましょうという動きがあることを踏まえ、「英語以外の言語」という表現に書き換えた方がよいと思います。また、「設けるべき」との表記は少し強すぎる気がするため、英語以外の言語についてディスカッションをするなど、学ぶ機会を促すということでよいと思います。

●佐藤部会長

語学の習得はきっかけであり、中学生ぐらいに独学で覚えた人も多くいると思います。

○荒木委員

そのことも探究型に結び付いていき、自由研究で英語以外、例えば韓国語について調べることを教育する側から積極的に提示するということが非常に大切だと思います。「英語以外の言語をもっと堂々と勉強して学校でも認められる」「こそこそ勉強しなくてもいい」というメッセージを伝え続けることが大切だと思います。

●佐藤部会長

県内にも韓国語やロシア語を話せる子がいることを知ることができる場や披露できる場があると良いと思います。

○荒木委員

英語スピーチコンテストだけでなく、他の言語も開催していただきたいと思います。

●佐藤部会長

是非、国際教養大学にも一助いただけたらと思います。

【提言4】

●佐藤部会長

提言4についてお願いします。

●佐藤部会長

背景の1と2は一緒にし、一つは不登校の実態、もう一つは特別支援教育に対してという

ことでよろしいでしょうか。

では、提言と具体的な方策についてお願いします。

私から発言したいと思います。④の「特別支援教育に関する研修や勤務経験とキャリアステージとの関係性についての検討」は、私が出させていただいた意見です。既に秋田県では、6年前に教員育成指標を策定して、教員研修を行っているところですが、その時点で特別支援教育に関する研修や勤務経験は検討されていなかったと思います。一方、特別支援学校や特別支援学級の勤務経験は、地域や学校の事情等があり、キャリアステージへの位置づけは容易でないと思います。「それを経験に任せるということで良いのか」「キャリアステージに反映するとしたらどのような視点が必要か」などは検討に値すると思います。

これは、進んで取り組んでいる都道府県はあるのでしょうか。

□熊谷特別支援教育課長

情報はないです。

●佐藤部会長

どこも手探りだと思います。

○高橋委員

前提として、文科省の指針としては出たものの、実際はやっていないということですか。

□熊谷特別支援教育課長

令和4年3月に「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議」からそのような措置を講ずるように努めるとした報告が行われました。その後、文科省から「特別支援教育を担う教師の養成、採用、研修等に係る方策について」という通知が発出され、県としては、各市町村教育委員会に通知をしたところです。

現状として、特別支援学校としては、小・中・高校と研修人事交流を行っておりますが、採用後10年以内の方となると、現実的に難しい面があります。そういった意見があるということを踏まえ、考えていく必要があるものと認識しております。

●佐藤部会長

私見ですが、特別支援教育という視点が不登校や問題行動の子どもに対して良い知見が得られるということや特別支援教育を進めていくことの重要性について、多くの教員から理解が得られていないため、ウェルビーイングにつながっていないと考えます。難しいことではありますが、検討していきたい内容だと思います。

○高橋委員

背景が全く分らなかったので、お伺いできて良かったです。先日、沖縄の小・中一貫校を視察してきました。「人数が少なくなればグレーゾーンや支援が必要な子どもが増えてくるのは何故だろう」とおっしゃる現場の先生方がとても多くなっており、良い方向性だと思っています。

また、佐藤部会長のお話もよく理解できたので、「研修や勤務経験とキャリアステージの関係性について検討を行うこと」と整理されていますが、研修や勤務を行うことが教員にとってメリットがあるというメッセージをもう少しクリアに出しても良いのかなと思います。行きたいと思う先生が少ないということでしょうか。

●佐藤部会長

先生方は、そこまで御自身の異動希望はお持ちではないのではないのでしょうか。ミッションが与えられたところでそれぞれ頑張るという意識が強いと思います。校長先生は、いらっしゃる先生をどう学校現場の課題に合わせて体制を作っていくかということを考えることで、結果的には個々の教員の経験や能力が内に閉じてしまい、小・中・高と特別支援学校との垣根は越えにくいと思います。やらなければならないとすれば、人事交流の仕組みをうまく作って、勤務経験を生かす形にしなければならないと思います。

○高橋委員

入るということに意義があるということですね。

□熊谷特別支援教育課長

検討には値すると思います。提言の背景に「採用後 10 年以内」と入ってしまうと、これをやらなければならないという方向になってしまうので、個人的には少し難しいかなと思います。全ての教員が特別支援教育の視点をもって教育に携わるということは、非常に重要な現代的課題であり、それをきちんとキャリアステージの中に入れていくということは大切であると思います。

●佐藤部会長

声なき声はあって、自分の子どものこういうところが気になるけど、なかなか言えない親御さんもいると思います。特別支援教育の視点をもって自分の子どもを見てもらえらるとなると安心すると思いますが、先生方には様々な課題があって見えなくなっており、あれもこれも要求されてもできない。特別支援教育の経験がきちんと位置づけられれば、先生たちは経験を元に、子どもたちを見る目が変わると思います。保護者の声としては、これを進めてほしいと思います。

○高橋委員

同意します。沖縄を視察した際に、ある学年は13人のクラスの中に、広い場所にいるのが苦手で、辛いと感じると先生の教卓の下に潜りたがる生徒がいました。普通であれば、「教室でちゃんと座っていなさい」という声掛けをするところだと思いますが、先生はその生徒に対して「いいよ、潜っておいで」と言って対応していました。その先生は特別学級の経験がある方で、このような事態にも余裕をもって対応しており、それだけでもクラスの平和さが違いました。

○荒木委員

そこが提言の背景の1～3につながると思います。色々な背景があり、不登校児童の原因は様々であって一つではない。多様な教育的ニーズのある子どもへの対応にもつながっていくことになります。多様な教育的ニーズのある子どもたちが出てくる中で、例えば「秋田の先生は全てこのような特別学級の経験や研修を受けています」くらいの勢いがあっても良いのかなと思います。キャリアステージのどこかで資格や経験を得ていることは強みになり、秋田らしい教育の色を出すことになります。

先日、新聞で秋田の学力向上を目指し維持するために、不登校問題など影の問題がますます顕著に表れてきているという記事を読みました。学力はもちろんですが、「そこからつまずいてしまった子どもたちやその方向に進みたくない子どもたちも全て含めてサポートするような豊かな教育環境を整えています」という色を出せると思います。

●佐藤部会長

提言の文章はこのままになると思いますが、この議論については、教育次長から御賛同いただけたようです。

□藤澤教育次長

特別支援教育について、今は、経験のある先生に頼ってしまっているのが現状であり、教員のキャリアステージに応じて必要となる資質能力は明確にしていく必要があります。高校では特別支援学校の先生にケース会議に来てもらい、特別支援学校の先生から小学校の頃から見ている経験を踏まえ「この子がこういうところがあるから、こういう指導をした方がよいよ」といったアドバイスをいただいています。必要な資質能力を各キャリアステージで明確にし、多くの先生がそのような指導をできるようにすることが理想ですが、なかなかそこまでは到達していないのが現状です。

○荒木委員

③のラーケーション制度の導入についても、不登校児童生徒の多様な学びの場の一つとして検討できないか、こちらにも入れてはどうでしょうか。不登校の子どもたちをサポートする会の親御さんたちから「学校に行かない生徒に対しては、学力も測れなく、出席もゼロ

のため、通知表には全て斜線が入れられて渡される小・中・高がまだまだ多い」との話を伺ったことがあります。「学校に来ないから出席や成績を記載できない」という学校側の説明はある程度分かりますが、これだけの人数の子どもたちが行き渋りや不登校を経験していることを踏まえると、通知表に斜線を引く以外の方法の模索など、きめ細かな配慮が必要だと感じます。最近、文科省から発表された新しい方針では、認定されたフリースクールに行くと出席扱いにするとされており、秋田県でも早急に検討してほしいという要望があることから、まずは、ラーケーション制度の導入に向けた制度の検討は必要だと思います。また、フリースクールの数が増えてきていることを踏まえ、県としてどのようなフリースクールであれば出席扱いとなるかなど、要件を整理する必要がある、その周知も併せて早急に行っていただきたいと思います。

そのほか、子どもたちがもう一度学校に行ってみたいとなったときに、転校をスムーズにできるシステムを作っていただきたいです。五城目町では、全国の不登校の子どもたちに呼びかける形で国内留学ができる素晴らしいプログラムを実施しています。県内の生徒が五城目町に行きたいとなった場合に、同じように受け入れてもらえるのか分かりませんが、転校ができる制度があると救われる子どもたちがたくさん出てくると思います。

○高橋委員

市内でも転校できないのでしょうか。

○荒木委員

スポーツではあるようですが、不登校についてはまだまだハードルが高いようです。「なかなか認められない」との話を聞きます。

□伊藤義務教育課長

その旨を市町村教育委員会に伝えていただき、校長の裁量のもと、保護者の意向も踏まえながら、転校することがお子さんにとって望ましいというところであれば、転校させることも可能だと思います。転校を制限している現状はないと認識しています。

○荒木委員

そのことが幅広く一般の方々に周知されていないことが課題だと思います。校長先生の意見に左右され、「前例がないから」などの理由や学校側の都合により、なかなか認めてもらえない例もあるようです。幅広く周知されていない分、「公にそんなことは認められていない」との思い込みで、要望を出すことも考えつかない保護者や「ハードルが高いこと」として暗にほのめかされ、困ってしまう保護者もいます。ケースバイケースではありますが、積極的な周知の有無で捉え方が変わってきます。各学校の校長先生によって言うことが違うと不公平感が生まれてしまうことから、県や市町村の教育委員会が積極的に周知すると、

救われる生徒も親御さんも多いと思います。

●佐藤部会長

現在の書きぶりで含まれていないとも言えませんが、もう少し踏み込んだ表現にした方が良いのではないかとことです。

○廣田委員

④について、もう少し広く「インクルーシブ教育の推進」のような形にして、その中の方策として特別支援教育があった方がより良いのではないのでしょうか。

また、①～③の「不登校児童生徒等」というのは取ることはできないでしょうか。豊かな心と健やかな体の育成は不登校児童生徒のためだけではなく、ICT活用も不登校児童生徒以外も活用していかなければならないと思います。バリアフリーとユニバーサルデザインという言葉があり、現行の書きぶりはバリアフリー的です。ICTはみんなを幸せにするテクノロジーだと思うので、「不登校児童生徒等」という記述は外せるなら外した方が良いと思います。

○荒木委員

「インクルーシブ教育の観点から」という文言をどこかに入れた方がよいと思います。

○高橋委員

今の廣田委員の御意見は、「不登校児童生徒等」という記述を具体的な方策では残しつつも、提言では外していくということでしょうか。

○廣田委員

手っ取り早い解決方法はそのとおりです。一応「等」と書かれており、このままの記述でも全ての児童・生徒が含まれていますが、行政文書に慣れていない人は、そこが分からない可能性があります。この記述を取ってよければ取った方がよいと思います。

●佐藤部会長

「不登校児童生徒への」は取りましょう。

【提言 5】

●佐藤部会長

最後に、提言 5 についてお願いします。

背景については、1 と 3 に絞って、2・4・5 は具体的な方策の文章の中に入れてはどう

でしょうか。

○荒木委員

3番目の「日本人としての自覚をもちつつ」というのは問題ではないかなと思います。ここはあえて入れる必要があるのでしょうか。

●佐藤部会長

日本人ではない子たちを指しているのだと思います。

○荒木委員

国際化を別のところで提言しておきながら、ここでこのように書くのはどうでしょうか。日本人としての自覚とは何かを説明しないといけないので、あえて入れる必要はないと思います。

●佐藤部会長

文科省ではこの言葉をよく使っています。

○荒木委員

文科省が使う「グローバル・ヒューマン・リソース」など「人材」と関係する言葉も、見方によっては使い捨てのような印象を受ける場合があります。疎外感を持たれるおそれがあります。

●佐藤部会長

それでは、「日本人としての自覚をもちつつ」の部分は削除したいと思います。

○荒木委員

④の具体的な方策に「子どもたち」とありますが、生涯にわたり学び続けるための方策であることから、子どもたちだけでなく大人も含めてはどうでしょうか。例えば、私も秋田の伝統芸能を学びたいと思っており、大人の方が学びたい意欲が高まっている方が多いかもしれません。そのため、ここであえて子どもに限定しなくてもよいのではないのでしょうか。秋田に住んでいる住民だけでなく、県外の方も伝統芸能を知ってもらうことで、秋田に住みたいと思う人も出てくると思います。風通しのよい県だということをアピールすることにもなると思います。

また、④の2点目について、「インターネットを活用し、海外に向けて広く発信」とありますが、日本の地域を飛び越して海外に行くよりも、「国内外」にした方がよいと思います。

●佐藤部会長

その方がよいですね。

○高橋委員

それに併せて、③の「児童生徒をはじめ、県民が」というのも直した方が良いでしょう。

●佐藤部会長

「児童生徒をはじめ、」を取ればよいでしょうか。

●佐藤部会長

それであれば、「県民が」も取ってしまえば良いですね。よろしいでしょうか。

【全体を通して】

●佐藤部会長

その他、全体を通して何かありますか。

□伊藤教育庁総務課副主幹

今年度は本日が最終です。この後、部会長も含めて、メール等でやりとりしながら仕上げていくという流れになります。

○荒木委員

私も色々なことを教えていただきたいという思いで委員を引き受けさせていただいたことから、教育庁側からも、現場を知っているエキスパートとして御意見をお聞きするなど、委員も事務局側も対等な関係で議論ができたかと期待しています。可能であればいろいろと現状や課題を教えてください。

○高橋委員

色々な思いがあり、このような提言案にさせていただいたと思います。事前に資料をいただく段階で「なぜこれが入っているのか」という思いが分かると議論が更にスムーズに行ったかなと思います。

●佐藤部会長

これまでにない視点からの意見をたくさんいただいたと思います。教育施策について少しは理解していたつもりでしたが、多くの方に理解される伝え方が必要と反省しました。今後とも積極的に意見をいただきたいと思います。

●佐藤部会長

様々な意見が出されましたので、事務局で整理していただいて、提言案をまとめていただきたいと思います。ここで皆様にお諮りしますが、提言書の最終校正、提出後の手直し作業については、部会長に御一任いただけますでしょうか。

御承諾いただいたということで、部会長専決事項としたいと思います。なお、今後、項目の追加など、大きな変更があった場合には、皆様にも報告させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(3) その他

●佐藤部会長

最後に議事(3)その他についてであります皆様から何かございますか。

なければ、第3回部会の議事は終了したいと思います。

それでは、進行を事務局にお返しします。

3 閉 会

□佐々木政策監

本日は長時間にわたる御審議、誠にありがとうございました。最後に事務局を代表しまして、教育次長の藤澤より一言御挨拶を申し上げます。

□藤澤教育次長

佐藤部会長をはじめ、廣田委員、荒木委員、高橋委員におかれましては、3回の会議と限られた時間の中、大変活発な御議論を行っていただき、本当にありがとうございました。

先ほど荒木委員からお話がありましたが、私共も色々と情報提供できればよかったのですが、時間的な余裕もなく申し訳ございませんでした。しかし、知らなくても外から見てどう感じているかという意見を必要としていたことから非常に参考になったほか、事業化できるものがあれば、財政課とも折衝しながら、検討していければと考えております。

色々と情報提供し合いながら議論を深めるところまでは難しかったかもしれませんが、私共はそう考えておりません。非常に参考になる御意見をたくさんいただき、それをまとめるのが私共の仕事ですので、今後、事務方でしっかりとまとめさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

□佐々木政策監

それでは、以上をもちまして、第3回教育・人づくり部会を閉会します。

(以上)